第2回　浜松市未来デザイン会議　議事録

平成25年11月2日（土）午後4時30分～午後6時40分
浜松市役所本館8階　全員協議会室

1　開　会

（事務局）　（事務局）ただいまから、第2回浜松未来デザイン会議を開会します。まず、今回の会議から参加いただく委員に簡単に自己紹介をお願いします。宗像委員よろしくお願いします。

（宗像委員）　聖隷浜松病院で看護師をしている宗像といいます。よろしくお願いします。

老人看護専門看護師として、高齢者の看護を専門に活動しています。高齢者というのは普通の成人と違って、一つの病気を治して帰られるという方が本当に少ないです。認知症や、加齢による筋力の低下など、色々な要因が複雑に絡み合って、家に帰れないとか、生活の質を下げてしまうことなどがあります。そんな中で、この人にとっての医療はどんなものが良いのかを医師と共に話し合うために専門看護師という資格を取得して、その視点を大切に、医療の現場で活動しているところです。この貴重な会議では、そういった視点を持って、高齢者の地域医療をどう支えていけば良いのか、どうあるべきなのかを皆さんと一緒に考えていきたいです。よろしくお願いします。

（事務局）　ありがとうございました。宗像さんから見て他の委員がどんな方々か分からないと思います。資料1に名簿があるのでご覧ください。

次第に戻ります。本日から未来ビジョンの策定に向けて本格的な議論に入ります。これからの進行は、会議のコーディネーター役をお願いしております、静岡文化芸術大学根本学部長にお願いします。根本先生よろしくお願いします。

2　基本構想について

（根本学部長）　司会進行という非常に大役ではありますが、私はあくまでコーディネーターです。是非、建設的かつ未来志向の議論が進むように努めていきたいので、よろしくお願いします。

では早速本番ということで進めていきますが、次第をご覧ください。

最初が基本構想について、2番目が未来の理想の姿について、次が意見交換会についてです。最後の部分は今後のスケジュールの話になりますので、今日のデザイン会議の運びは2と3がメインとお考えください。時間の配分としては、事務局から材料の説明があり、その後で意見をやり取りします。そしてまた3番目について事務局で用意した材料の説明を受け、意見交換をするのが今日の予定です。

最初に次第の2番目、基本構想について、資料2の説明を事務局にお願いします。委員の皆様には資料2をお手元にご用意ください。

（事務局）　（資料2説明）

（根本学部長）　ありがとうございます。

第1ラウンドは基本的な自治体のビジョン、お手元の資料1ページ目の中の大括りな、非常に長期的、広域的な大きく括ったビジョンのところが基本構想で、一番抽象度が高いものです。それから段々と、具体的・個別的になっていって単年度の計画という構成になっています。まず一巡目の論点ですが、2ページを開くと、まず将来こういう姿が我々の目標としてふさわしい、これが良いということを議論したいと思います。今日のところは、こういう枠組みを用意して、これで議論をスタートすると理解いただければと思います。ここに向かって進もう、環境で温室効果ガスを2割削減しようというような目標のようなものです。4ページから後が第1ラウンドの論点で、仮の案ではありますが、一般市民と行政が一緒になって作る計画の構成を示しています。「はじめに」ということで、憲法の前文のように「前文」を付けて、非常に基本的な、全体をカバーするようなキーワードを置いたらどうかという案が提示されています。そして次に、「未来の理想のすがた」ということで、30年後を想定したこういう社会、自治体、都市が良いな、といういくつかの柱を作ろう、というような構成で議論をスタートしようということです。

まずは第1ラウンドですが、こういう構成でどうだろう、これで議論を始めて良いかどうかについてです。それから「はじめに」の中に入れる項目として、今ここで3つ決めるとか4つ決めるとかということではありませんが、このことは外してもらっては困るとか、是非こういうテーブルに参加したからには言っておきたい、とか、その辺りの議論から始めていきたいです。もちろん途中で進め方に疑義があったら言ってください。まずこういう枠組みで議論しようということについて意見を伺いたいです。

非常にシンプルな構成ですから、違うことを提案するとしてもあまり選択の余地はないと思います。私から提案しますが、物事の進め方として、一つひとつ決め込んでいくというやり方もありますが、このテーブルはそうではないと思いますので、大づかみなところから議論を始め、個別の分野に入っていくことにしたいと思います。まずはこの枠組みで議論をスタートして、行きつ戻りつしながら集約していくというように進めていきたいと思いますがいかがでしょうか。なるべく具体的な話題の方が、議論が始めやすいと思いますので、このような提案をさせていただきます。

では次に、初めに事務局はダミーと言っていましたが、全くゼロから作ったものではなく、皆さんに出していただいた資料6があります。浜松という都市の未来はこうだという姿を皆さんから出していただいたものを一覧表にまとめたものです。こういったものを見ながら事務局がたたき台を作りましたが、これは決して十分なものではありません。まずは資料6を見ながら、市民協働であるとか、課題解決であるとか、クリエイティブシティといったキーワードについて、私はこれを追加したいとか、これは違うのではないかと自由に発言をいただきたいと思います。

（外山委員）　今デザインの仕事をしていて、創造都市って何かと色々な人に聞かれます。コピーライターを10年くらいやっている経験上、色々な方の意見を反映していくと、最終的には当たり障りのない言葉に落ち着くことがよくあります。例えば「みんなで心豊かにハッピーに」という感じの、誰もが意見をしにくいところに落ち着くことがよくあります。この会議では数値目標までいかなくても、全国で一位とかを入れたいと思います。創造都市とは何か？　という質問が私に来るのは、多分デザインをやっている人はク

リエイティブな仕事をしているから、創造都市に関わっているのではないかと思われているからだと思いますが、実際は市民一人ひとりが創造性を働かせて、ということだと私は理解しています。こういう言葉だと、ちょっと抽象的すぎて理解されにくいと思います。柱を作るに当たっては一つひとつ、ちょっと具体的な言葉を入れていけば、より指針として分かりやすいと思います。

（根本学部長）　今の論点だけまとめます。一つは、多数の意見をまとめると当たり前のものになりがちであるということです。このテーブルは我々が全権を委託されて全部を決める権利がある訳ではなく、行政は行政で、車の両輪のように検討を進めておられます。我々としてはあまり足かせなしに、尖がった発言でも良いので、あるべき論をまずはどんどん提案していきたいと思います。それからもう一つ、もうちょっと具体的に、というのは今日の第2ラウンドの「未来の理想の姿」のところで、また詰めていければと思います。他にいかがでしょうか。

（田中委員）　ここにある「市民協働で築く『未来へかがやく創造都市・浜松』」というのは非常に良い言葉だと思います。全自治会738ありますが、非常に広い地域にあり、それぞれ、都市の関係、中山間地域、更にその向こうと、自治会連合会でと思っても、それぞれの意見が同じようなことでも違います。738の自治会を上手く運営していくには、産業とか教育とか福祉とかでまとめてみて、やっぱり浜松市に住んで良かった、将来浜松市に住みたいと、そういう方向へ持っていかないと意味がないと思います。30年後というと随分先だと思いますが、とりあえず10年毎に3回に分けて考えると説明がありましたが、それも一つの方法だと思います。既に自治会も一番行政に近い所で市民協働を毎日365日休みなく行っています。トップである市長が、こうやろうと考えていると思いますが、我々も現場にいますから、子ども、孫、外から来た人が、とにかく浜松に住んで良かった、これからも住みたいと思えるような、大きな枠を捉えた方が良いと思います。

（根本学部長）　「協働」というのは議論の材料ではなく、本番でも是非必要であるということですね。私の方から挑発的に投げかけをしてみたいと思います。一つは自治会の活動、地域に根差した活動は重要であることは言うまでもないですが、都市部でマンションとか集合住宅が増え、あるいはアパートが多いところですと自治会加入率が決して高くありません。調べたら浜松は加入率が高いですけれども。将来のことを見据えて、自治会がもちろん中心ですが、ともすれば自治会でカバーしきれなくなってしまうとか、あるいはマンションの管理とかが将来課題になると研究者は皆思っています。これはまた「未来の理想のすがた」で議論いただければと思います。それからもう一つ大きい話で、やっぱり浜松市は大きいです。先ほど738自治会とありましたが、人口6,000人の町なら、わが町はこれで行こうと合意をつくるのは割りと楽かも知れませんが、浜松は非常に多様性があって、広い自治体です。最初の意見にもありましたように、それを全部ひと括りにしようとすると、とても抽象的になってしまう可能性もあります。そうすると人口1万人の自治体と政令指定都市浜松市とビジョンの掲げ方が同じで良いのか、ということも論点になるかと思いますが、意見はありませんか。

（田中委員）　先生がおっしゃったように、自治会への関与について、現在もマンション、アパート等と持家との差は出ています。我々は将来的にも、若い方に自治会を理解してもらって、現在のような日本でいちばん参加率の高いものを維持していきたいと思っています。自治会活動が疎遠になると、あってはならないことですが、災害があった時に非常に困ることになります。阪神・淡路大震災の後に2度行って話を聞きましたが、いちばん頼りになるのは隣組だったということでした。9割ぐらいが隣組によって助けられたとのことでした。災害対応をする組織に警察、消防、自衛隊がありますが、古い言葉に「向こう3軒両隣」という言葉があるように、まずは近所付き合いが大切であると考えます。確かに毎年負担していく仕事は多いですが、それをやっていかないと役所の職員を増やすことになり、税金がかかることになりますから、どうしてもやっていかなければならないと思います。くどいようですが、住んで良かった、これからも住みたいと思えるようにしていくのが大切だと思います。前回市長が「浜松市はみかんのようにしていきたい」と言っていましたが、いろんな分野、地域が一つの枠の中でやるという発想は、みかんは市の花にもなっているし、ちょうど良いのではないかと思います。

（根本学部長）　他の皆さんはいかがですか。

（村田亜委員）　自治会の話ですが、私は若い部類に入ると思います。私は子どもの頃から浜松に住んでいるので、祖父、祖母の代から見ていますが、浜松市は県外から来られる方が非常に多いので、そういう方たちは自治会の付き合い自体を知らないで引っ越して来られます。自分の地元と浜松市の自治会の仕組みが違うということに戸惑いを感じている友人もいます。私は「向こう3軒両隣」は素敵な考え方だと思います。主人がとても小さな町の出身でお祭りにも参加させてもらっています。昔からの付き合いがあるからこそ助け合えるということがあると思います。政令指定都市浜松は大きなまちだからこそ多くの人の出入りもありますし、外国人も多い地域ですので、そういう場合、外国人は集合住宅に住んでいることが多く、そのフォロー等を新たに考えていかなければいけないのではないかと感じています。私たち自身も、自治会活動にもう少し参加しないといけないという感覚は持っています。

（根本学部長）　ありがとうございます。市長からご意見をお願いします。

（鈴木市長）　先ほどから政令指定都市という概念が出てきていますが、政令指定都市といっても色々あります。横浜、名古屋、大阪のようないわゆる旧5大市といわれる昔から都会で大きい都市と、それから浜松や静岡、新潟、岡山のように地方都市が合併して政令指定都市になったところは全く違います。政令指定都市というと大都会というイメージですが、その言葉にひっかかるのはよくありません。例えばDIDという指標があります。これは人口集中地域を示していますが、先ほど申し上げたような5大市は極めて高い割合を示しています。いちばん高いのは大阪市で99％です。つまり大阪市というのは市の面積のほとんどが人口集中地域です。横浜、名古屋も非常に高いです。しかし浜松は5.6％、つまり完全に田舎型の都市、分散型の都市です。人口集中地域が少なく、浜松は性質としてはどちらかというと田舎に近いということです。合併して広くなって人口も多くなったよう

に見えますが都市の性質としては田舎型の都市だということです。政令指定都市だから大都市というようなイメージですが、使い分けていただいた方が良いと思います。

（根本学部長）　今の市長の話でも、大きな田舎だということでしたが、ということは色々な特徴を持った地域が集まって一つになっている、まさに多様性ということだと思います。浜松にいると、日本人と外国人と分けられますが、多様性ということは色々な外国が集まっているようなものです。そういう中だからこそ協働が必要になってきます。ただ協働という言葉は便利ですが、その言葉を使ってしまうと、それで解決したような気分になってしまいます。一般の人に協働というと必ずしもこの字が出てきません。色々な「きょうどう」があります。便利だから「協働」と使ってしまうと意外に伝わりにくいので、こういう場で協働とはそもそも何だろう、市民団体だけが活躍することが協働ではありませんし、先ほど言われたように大企業と中小企業の協働だったり、市民と企業の協働だったり、健常者と障がい者の協働、世代別の協働など色々あると思います。協働が上手くいくことによって産業にもつながればクリエイティブな部分につながると思います。資料6を見ても、協働という項目への「理想の姿」が少なく、3項目しかありません。しかし他の項目を見ていくと、これって協働だよなと思うことが沢山ありますので、協働をもう少しちゃんと提示できると良いと思います。

（須藤委員）　市民協働について発言があり、私もこの言葉には思いがあるので発言させていただきます。私もずっと専業主婦でしたが、PTA活動を始めとする地域のボランティアみたいな活動に関わってきている訳ですが、最近どこの団体でも問題になっているのが担い手不足です。今もNPOにいくつか関わっていますがどこでも会員の高齢化、それとほとんど有償ボランティアというぐらいの活動になっています。お金が少ないから人が来ないという訳ではありませんが、今は女性も男性も老いも若きも働き、この中にもありますが70歳を過ぎても元気に働く人たちがいるということになってくると、では市民活動を担っていくのは誰なのかというのが非常に大きな課題になると考えています。市民協働は素晴らしい考えですが、担い手をどうやって育てていくのか、待っているだけでは自然には人は集まってこないということをしっかり認識した上でこの問題を考えていきたいと思います。

（根本学部長）　ありがとうございます。いくつか協働ということについて意見をいただきまいした。担い手が、という具体的な話については今後議論を広げていきたいと思います。それから協働というのは確かに広い概念で、定義も一定でなく、我々がよく使うのは、この「協働」はパートナーシップです。最小限のパートナーシップは夫婦です。責任とか義務です。単に手伝ってあげることではなく、一つの目標に向かってとか、一つのプロジェクトを成し遂げるためにパートナーとして担っていけるというのが一つの定義の仕方としてあります。あとは外国人市民もたくさん居住しているし、地域自治会との協働が一番多いからメインだと思いますが、おそらく多様な協働が積み重なって、この市自体が多様性を持っていますから、そういうことが重なり合っていくようなことがあるのかなと思いました。もう少しの時間ではあるが、協働以外で重要なキーワードとして議論に据えて欲しい

ということがあればいかがでしょうか。今サンプルであがっているのは、課題解決、持続可能とか、クリエイティブという言葉が上がっています。あと一つ二つご意見いただければと思いますが。

（酒井委員）　先ほどの自治会田中さんから「住んで良し、働いて良し」という話がありました。このまちにずっと住んでいたいというのは重要だと思います。住みたいと思えるまちにしたい、というような文言は入れたいと思います。

（根本学部長）　議事録に残して議論を深めていきたいと思います。住民が住んで良し、というのはもちろんそうですが、企業活動も長くここで定着して頑張りたいというまちでありたいというのもあります。最近は、いとも簡単に事業所が引っ越してしまうのを見聞きしますが、この地で事業をやっていて良かったなということもあると思います。後はいかがでしょうか。

（外山委員）　先ほど市長から田舎という言葉が出ました。私の周辺でもこの話は出て、実は浜松市民で、浜松を都会と思っているか、田舎と思っているかというのは、すごく分かれると思います。私なんかは東京へ仕事に行って帰ってきて、日本で一番便利な田舎だと思っています。そう言うと皆さん、俺も田舎だと思っているという人がかなりの割合でいます。ダミーの文章を見ても、どうしても都市寄りの話になりがちで、産業などが多くなると思いますが、やはり田舎っていうのが先ほどの自治会の話もそうですが、昔ながらのという部分では田舎という言葉が包括すると思うので、田舎というキーワードを忘れずに、継続的に話していければ農業の話とかにもつながっていくと思います。

（鈴木市長）　今の話は私も賛成です。田舎というのは決して悪い言葉ではなくて、「住みやすい」に置き換えられます。都会は意外と住むのが大変です。私も40まで東京にいましたけれど、都会に住むのは大変なことです。浜松というのは住みやすいし、暮らしやすい。田舎であっても、都市機能が完備しているから意外と良い街じゃないかなと思います。私も田舎というのは言葉としては悪くないと思っています。

（根本学部長）　それではまず第1ラウンドは一旦引き取って第2ラウンド、より具体の話に進んでいきます。まだ十分じゃないという面ももちろんありますから、冒頭申し上げたように行きつ戻りつという部分は残したいと思っています。ということで第1ラウンドを振り返ると、協働をどう考えるか、誰の協働なのか、この議論を深めていくことが、重要な柱です。その中でも住んで良かった、住み続けたいと思える都市であってほしい。政令指定都市であるけれど、歴史も違うし、抽象的に大都会と思わない方が良い。むしろ良い意味での田舎、この地域の特質というのをよく踏まえて柱を考えたいと思います。その辺が大きいポイントです。協働の中身、住んで良かった、働いて良かった、そして良い意味での田舎の良さがある、これが浜松の特質ではないでしょうか。これを忘れずに議論で深めていきましょう。あと枠組みについてはこれで議論をスタートしてよろしいでしょうか。

（異議なし）

3　未来の理想の姿について

（根本学部長）　では第2ラウンドに進みます。先ほどの資料6で皆さんからご提案いただいたことと合わせて事務局で色々なデータを用意しているようです。データの積み上げで今年がこうだから来年はこうだということで終わってはいけないため、もう少し自由に発想しようという話もあります。その一方で今日はこうしてデータが出ています。事前の打ち合わせで事務局から矛盾しないかという話がありましたが、私は矛盾しないと思います。勿論自由な発想でこうだということは良いですが、あまりに根拠がないと戯言になってしまいますので、ある程度の現状を踏まえた上で、だから現状で良し、とするのではなくて、こうしようという議論ができればと思います。

では事務局から材料の説明をお願いします。

（事務局）　（資料3、4、5、6説明）

（根本学部長）　ありがとうございます。時間のやりくりが中々大変ですが、何とか建設的に進めていきたいと思います。この第2ラウンドは30分ぐらいを想定しています。ここに220個の項目を委員の皆さんから提案いただいています。220個のままではなく集約していきたいとおもいます。我々は勿論自由闊達に議論を交わす訳ですが、ここで全ての議論が決まるわけではなく、この後説明がありますが、意見交換会が予定されています。今日のテーブルの我々のミッションは次の意見交換会に向けて、まずは材料として我々が出した220個を集約してほしいというのが事務局のシナリオでした。ただ30分で220個を10本の柱にこの場で集約しましょうという訳にいきません。できるだけのことは進めますが、その辺りのことはゆるやかな進め方を提案したいと思います。なるべく喋らないようにしようと思いながら申し訳ありませんが、まずA3のマップがあります。決して単純に多数決ではありませんが、多くの委員の皆さんから共通してご指摘のあったキーワードが赤い色で浮かび上がっています。これで決まりということではなく、まずはこういう意見が出ましたということです。このままこれが重要な柱になり得るのか、という視点が必要になります。これは事務局が言ったように、市民と行政と協働して作るビジョンですから、行政の側からも必要だという柱が後で出て来るかも知れません。まずは市民目線で、このテーブルはそれで良いと思います。一覧表を見ていただくと、子ども、エネルギー、女性、育成、教育、学童保育、公共施設とか、ピンクや赤のところが複数の委員の言及があったというレベルのもので、これは参考になると思います。もう一つの材料が資料6です。資料3、4、5についてこの場で逐一、これはどうだと議論をするとそれだけで終わってしまいますので、脇に置いて確認しながら進めていきたいと思います。資料6の220を10個にできるかというと中々そうはいきません。だとすると次の意見交換会に向けては事務局、コーディネーターで相談して議事録を見ながら案を作りたいと思います。単純に多数決で決まり、ではあまり建設的ではありません。220人分を一人ひとりが見るというのは大変ですから、私はここを発言したが、改めて見ると例えば「産業」という柱があって、この中でどうなのかというふうに意見をまず出してください。できるだけ第1ラウンドでご発言いただけなかった委員の皆さんに、積極的に発言いただければと思います。勝手ながら資料6をもとに一つ目の柱から進んでいくという方式を取って、勿論戻っての発言もOKということにしますが、A3(資料6-2) を脇に置きながら、資料6の1ページ目をご覧ください。産業

の柱のところにずらっと並んでいます。私はこの部分で言及したが、他の委員がこんなことを言っている、改めてみてみるとさてどうなんだろう、という辺りからご発言ください。いかがでしょうか。

事務局からあったように皆さんからいただいたものがリストになっています。他の分類とまたがっているのも勿論ありますが、これできっちり分類してしまうということではありません。いかがでしょうか。

（酒井委員）　私自身は産業というところでは漠然とした、発信するとか、スローガン的なものにしました。他の方は「ベンチャー企業がアジアで最も仕事がしやすい・・」「サテライトオフィスの件数が・・」という数値目標的なものも入っていて、浜松は地の利が良いところで、東京、大阪からも朝から来て昼には仕事ができる、他所から呼び込んで来られるというのは是非とも残したいです。それに伴ってUターン率が、とかいうことも併せて、この辺は産業を育成する、作るという意味で核としたいと感じました。

（根本学部長）　地の利の良さ、外から来る、私がちょっと気になったのは資料5-2の15ページ、浜松市の製造品出荷額が2007年以降、ちょっと下がり気味であというデータです。一つの数字で決定的なことではありませんが、ある意味で新陳代謝がありますので、また新しいビジネス、既存のビジネスもここで創業して良かったということもあります、新しいビジネスも外から入ってきて、出世の家康くんのまちだから、或いは外からやってきてもこの地で創業して良かったな、事業が展開したなというビジョンがあると思います。

産業について、他にはいかがでしょうか。

（松尾委員）　やらまいかという言葉が資料の中に出て、気になりました。以前から浜松はやらまいかという気風があると言われてきましたが、最近の雰囲気ではそれが欠けてきたと感じています。特に企業の創業者、浜松は大きな企業を創業した方が出たまちだと思いますが、そういう勢いが欠けている感じを受けます。一つは大企業があったが故に、中小企業、下請け企業としての根性が染みついてしまったという感じを受けます。一方小さくても頑張っているところもありますが、そういうところが昔と違って上手く伸びにくい環境になってきたかなということもあると思います。その辺で、失敗しても良いからチャレンジして再生していける環境が上手くできるといいと思います。

（村田亜委員）　松尾さんとは違う視点ですが、私も個人目線で、やらまいか精神が落ち込んでいると思っています。失敗を受け入れてもらう体制もそうですが、若者などを、受け入れてくれる体制というものが今後考えていく時に、もうちょっと必要ではないか、と一会社員として感じるところはあります。こちらから提案してもやはり中々受け入れてもらえない環境であったり、言うことによって自分の会社人としての人生が違う方向に行ってしまうということがあったり、またそういう状況を見ている人も多いのでやる気も無くなるという状況です。一人がやる気がないと自分もといった雰囲気、病気みたいな感じというのがあると思いますので、社会の仕組みとしてそういうことではないといいなと感じています。

（根本学部長）　ありがとうございました。ここは共通して何人もの方がベンチャーですとか、ここで創業できるとか起業に触れておられます。実は創造都市の中にも社会的包摂、寛容性、尖がった個性であってもそれを受け入れて伸ばしてあげることができる、というのは重要な論点だと思います。次に今の産業も含めて、ページをめくっていただくと農林水産業、農業、或いは林業という辺りをご覧いただいて何かいかがでしょうか。観光も含めていただいて良いかと思います。

（松本委員）　浜松は政令指定都市ですが、他の政令指定都市とは異なった特色があると思っています。浜松には工業、商業、農業、林業などほとんどすべての産業があり、比較的弱い産業は漁業くらいです。すなわちこの会議では、「都市部から中山間地域まであり、また産業面でも多様性を有するということで‘国土縮図型’の政令指定都市」という言葉が使われています。今までみたいにヤマハ、ホンダ、スズキ等の大きな会社があって、そういう会社が引っ張って行くという構図ではないと思っています。また、東京、名古屋、関西に行くのにも便利であり、地理的にも恵まれていす。このような利点を最大限に活かすべきだと考えます。

（根本学部長）　ありがとうございます。市長からも話がありましたが、浜松市は非常に多様性を持っています。そして国土縮図型、30年後ということを考えると今の国際分業で得意なところでやればいいじゃないかというのも、本当に30年後そうなのか、また想定外の災害があるかも知れない、その時に自立して、安心していけるのか、そういうことを考えた時、こういうフルセットで全部揃っているというのは決して非効率ではなくて、大いなる可能性があるという気がします。他の皆さん農業林業の分野でいかがでしょうか。

（鈴木委員）　この農業という分野がこれから命の教育ですとか食育ですとかの分野を担っていくのではないかと思っています。そういう意味で自然を体験できる場であり、子どもたち、また高齢者や色んな人たちの受け入れも含めて、農産物を生産するばかりが農業ではないという意味で、30年後、農業があるから子どもたちに命の大切さが教えられるような産業になっていってもらいたい、なるのではないか、その要素は十分にあると思います。

（根本学部長）　20世紀はとかく分業社会で、国際分業、作る人は作る人、食べる人は食べる人ということは確かにありますが、農業には、地産地消や作っている田園風景の中で子どもたちが育つといった価値もあります。
　それでは駆け足で申し訳ないが、続けて、労働、健康福祉、高齢者、障がい者、医療、この辺で何か意見をください。自分目線で発言をお願いすします。

（宗像委員）　高齢者について意見を述べさせていただきます。高齢社会なので高齢の方が住み慣れたところで過ごしていくのは大きなテーマになってきますが、病気や認知症で住み慣れた自宅での生活が困難になっていくケースは今も多く見受けられます。自宅で過ごせず、家族に委ねられるがご家族も看られず、泣く泣く施設へ。本人は望んでいませんが、施設に行くというケースも何例も経験しています。その中で17の高齢者の理想の姿というところで、家族が安心して居宅介護が続けられ、お年寄りも住み慣れた町で

暮らし続けられるという提案をされた方がいらっしゃいますが、ここは私も賛成です。ただこの表現ですと、そういう意図はないのかも知れませんが、どうしても家族が主体と読み取れます。高齢者がどうしたいのか、というところを絶対見過ごしてはならないということをいちばんに考えています。どうしても自分の意見が言えなかったり、意思の疎通が取れなかったりする方が、家族の判断や私たち医療者の判断に委ねられることが多いです。そんな時いちばん大きな課題になるのが、本人の意向だと思っています。そこをいちばん守らなければならないところなので、「高齢者が安心して」と、主語を入れるなどして、大事にしていけたらと思います。

（根本学部長）　30年後というと家族の在り方も大きく変わっているかも知れません。家族ももちろん大事ですが、高齢者というところを主語にして、家族の介護があっても良い、それ以外の選択肢もあっても良い、という展望を考えてほしいということですね。

（村田亜委員）　家族というキーワードがあったので、発言します。介護、子育てと労働というのはとても密接に関係していると思っています。他に看る方がいないと介護のために仕事を辞めなければいけないような状況に置かれている人もいます。そうすると、子育ての場合は女性がそこで悩むし、介護の場合は男性女性かかわらず労働がネックになってくると思いますので、介護休暇が一応企業でも認められていますが、中々、実際には取得できていないという状況だと思います。選択肢として家族が介護に関わりたい人はそれが可能、という状況をつくるのも必要だと思います。

（河合委員）　これから就職活動をする身なので、今まで上げられたことは全部、高齢者や働いている方のことに対してであって、新規に就職する若者に対することが書かれていません。浜松は山間部ですと車がないと仕事ができないという状況にあって、そうすると浜松からは東京や大阪にも行けるので、若い人たちが交通の便の良い都市の方に行ってしまうと思います。だからそういう若者も働けるような交通のあるまちづくりが必要です。また7番目の労働に「時短勤務が当然となり育児、介護への理解が進む」とありますが、少ない時間で働けるというのは介護や育児をしている人には良いですが、若い人にはバイト化が進み、雇用状況が悪化してしまうのではないかと思います。

（根本学部長）　若く、これから社会で活躍しようという人たちが希望を持って生活し、活躍できる都市であってほしいということですね。もう一つ、私が反応したのは、車社会ということです。ゼロか一か、車を使うか使わないかというような乱暴な議論ではなく、多様な交通手段ということになりますが、以前に比べて、どうしても車がほしいという憧れは方向性が変わってきた気がします。コンパクトシティというキーワードも出ていましたので、公共交通もきちんと整備されている、車も便利に使える、欲張りですが、何でも車があれば解決できるとしてしまわないで、交通手段の選択肢もきちんとあるようにする。そうすると若い人も都会に行ってしまうという選択肢にブレーキがかかるかも知れない。別の、まちづくり、都市計画の柱とも重なるのではないかと思って聞かせていただきました。

（須藤委員）　時短勤務が当然と書いたのは私なのでドキッとしました。私は、労働というところでいくつか意見を出させていただきましたが、市民が、暮らす人たちが自分の生活を大切にしながら生きていけること、働くことができ、子どもを育てることができ、また年老いた親を看ることができるという、人間らしい生活を取り戻すために何が必要かという視点で、ワークライフバランスの推進というところを書かせていただきました。ワークライフバランスという言葉を使ったのは二つとも私なので、一つにまとめることは可能です。次の、市内の企業でも市役所でも女性の管理職が増えてほしいというのも働き方に関連していますので、女性の登用ということに関してもっと理解がほしいという観点で書かせてもらいました。どうしても介護、子育ては女性の方にというのがこれまでの常識でした。でも親に対する支援ではなくて、子どもが育つために、誰が、どのように、何を支援していけばよいのかという観点でも考えていけたら良いかと思います。私が書いた労働というのは、子育てなどに関連したものだということを理解いただきたいと思います。

（根本学部長）　この場で無理やりすり合わせていくのではありませんので、ただ多様な働き方がある、それが何か若い人に一方的に不利に働くような懸念にならないよう、かつ、働く人の目線で、男性女性にかかわらず、自分の暮らしが自立していくという視点は共通することだと思います。それでは関連してですが、若者も住んで活躍できるまちということで、車社会だけではなく、他の選択肢もあっても良いか、ということもあるかも知れません。そういう意味で4ページから5ページにかけて、エネルギーですとか、都市計画、建設、住宅、交通、この辺りで何か意見がありますか。

（外山委員）　若者が働きにくいというか、私は今まちなかで起業していますが、まちなかで起業することは浜松で凄くリッチなことであるらしいです。実際まちなかで起業している事例は、おそらくいくつもあるわけではないと思います。そういう現状があります。エネルギーのことを見て思いましたが、浜松の観光というカテゴリーを見て、特徴的だと感じたのが、20世紀型観光、景色を見るとかそういうのが抜けていますが、それは良いと思っています。防潮堤が完成してPRするとか、エネルギーの太陽光とか、そういうユニークな観光、21世紀型の観光、他の地域は温泉に入ってどうとかいう観光をやっていたとしたら、浜松はそうじゃないユニークな角度からの観光というのが、これから30年後必要になってくるのではないかと思います。だから観光とエネルギーなんかを切り離して考えずに、ミックスして考えれば発想が飛躍的になるのではないかと思います。

（松尾委員）　多分この辺りの項目でいちばん書き込んだのは私だと思いますので発言します。ここには少し書かせていただいたが、産業観光というか、目的を持った観光というのが浸透してきて色々なところで行われつつあるかと思いますが、逆に30年後、それが普通になっていて特に目新しいことではなくなっているのかなという気がします。エネルギーと交通という意味で言うと、ここには書きませんでしたが、浜松はもう少し頑張って地熱発電に手が出せるといいなと思います。色々な自然エネルギーが沢山あるまちなので、自然エネルギーを、分散型電源を上手く配置して使っていける、バランスの良い形態ができると良いと思っています。一方で先ほど交通のことが出ましたが、理想的にはそれに乗って目的地を告げさえすれば自動的

にそこに運んでくれる一人乗り、もしくは二人乗りの小型の電気自動車みたいなものが一般的になっているというのが、30年後であれば可能だろうと思っています。そうすると先ほど言われていたような交通事情というのは解決して、しかもそれらは個人が持っているものではなく、共有してそこに置いてあるものとして使えるという状態であれば、問題が相当減ってきます。そんなまちになってくれると良いかなと思っています。

（根本学部長）　ありがとうございます。この辺のことについては、おそらく委員の間でも、色々な見方が共存するだろうと思います。30年後を一つのビジョンとして見ているということですから、何が目新しいかというのは確かに変わるでしょう。ただ常に新しいものにチャレンジしてそれを使いこなしていくまちであり続けるんだ、ということはあり得ると思います。それから交通についても、今の交通に発想をしばられずに、もっと自由に発想して、自動運転自動車というのも出てきているから、今政府でも特区などと言っているし、チャレンジし続けるということはあって良いのではないでしょうか。
よければ次に進んで、また戻っても良いので、7ページに環境、9ページに研究という柱もあります。それ以外は市民レベルの話が多いので、環境、研究、21世紀の未来の技術、科学というところで、もう一つ二つ意見をいただけないでしょうか。

（酒井委員）　環境とエネルギーは密接なもので、当然都市計画においても、環境を考えて都市計画を組んでいくというのも、これからは切っても切り離せないものになっているのではないでしょうか。一方で、研究というところも、環境に対する研究であったり、エネルギーに対する研究というものは切っても切り離せない、伸ばしていく必要性が高いものになってくると思います。ここで敢えて国際会議の誘致と書かせていただきましたが、COP10、京都議定書のような、環境会議を浜松に誘致して、市民の意識を高めるとか、世界各国の有数の研究者の方々が　浜松の土地で新しい未来先進都市に対して、環境の切り口で話をしてもらうのも必要ではないかと思いました。

（前田委員）　私は環境というキーワードでいちばん書かせていただきました。面白いなと思ったのは、私は山側の人間なので山側の環境を考えていますが、こうやって意見が出てきたのを見ると、みんなまちの中に緑を増やしたいとあります。私は山の方の緑を整備してまち側の人を山に連れて行きたいと思いましたが、まちの人からすると日常生活の身近なところに緑が欲しいという意見が出ています。そこは私としては考える点かなと思います。マップには出て来ていませんが、水はとても重要なキーワードだと思っています。資料5の25ページにある「急増する水使用量」ということで世界的に水の使用量が増えるとこれから30年先、水が必要なところで必要なだけ手に入るかというのは不明瞭だと思います。水というキーワードで皆さんに考えていただいてご意見をいただければいいなと思います。

（根本学部長）　今問いかけがあり、水、あるいは豊かな緑に関しての意見でも、それ以外でも良いのでいかがでしょうか。

（杉山委員）　豊かな緑ということに関して、豊かな自然というのはやはり浜松の都市部の人も求めているのだなというのがこの柱を見て分かりました。そうだとすれば、もっと都会の東京や大阪の人も緑の多さを求めているのかなと思い、それなら浜松市の環境を観光として捉え、浜松の緑を観光資源にしていけばいいなと思いました。浜松は新幹線が停車する便利な地域なのにも拘わらず、森林、山、緑も優れているので、そこを観光資源化する重要性を考えていきたいと思いました。

（根本学部長）　ありがとうございます。ひとまずこのところの論点を固めます。水というと水系、だから上流から下流まで、一つの都市の中にあります。今とかく都市部は都市部、農村部は農村部、林業は林業と、バラバラになりがちですが、実はこれは一つの水系でつながっていて一蓮托生です。今、発言いただいたのは大事な論点で、関心をともすれば失ってしまっているかも知れないけれど、もう一度水系の中で絆を取り戻すということはあると思います。そのために色々な仕掛けができると思います。それを考えるのも我々の論点かと思って聞かせていただきました。それから観光、エネルギーということも出ましたから、地の利の良さを活かして、観光というのは神社仏閣や温泉もそうですが、こんなに豊かな地域資源が実は観光の対象になるというのは重要な論点かと思います。
　申し訳ありませんが次へ進ませていただいて、7ページの教育と、9ページの児童福祉、子育て、保育、この辺りについてはいかがでしょうか。

（村田亜委員）　一番当事者なので発言させていただきます。これをざっと見た時に子どもに対する支援は手厚いというか、みんな考えておられると思いましたが、母親というキーワードは一言も出ていませんでした。母親になった瞬間に社会から隔離される感覚が凄く強くあります。子育ては母親にお願いしようという感覚が強いのかなというのを感じます。母親の中でしか議論されていないと思いますが、自分の体調が悪いのに子どもを見てもらえる所がなくてすごく苦しかったとか、病院に行きたいが、子どもがいるから行けなかったので、一時保育というのを考えますがほとんど受け入れてもらえない状況にあります。その時にどうしたらよいか迷って、高い民間の保育所に頼るしか今はありませんが、実際に使える制度があるのに使えないという現状があって、ただそれに対して声を上げる人は誰かと言えば、母親です。しかし、母親の声が社会に届きやすい環境にはないと感じていますので、私も書かずにいましたがこれを見た後で気が付きました。母親という面でこれは虐待と密接に関係してくると思いますので、母親と社会のつながりについて議論していきたいとすごく感じています。

（根本学部長）　関連して他の方いかがでしょうか。

（酒井委員）　私も当事者なので発言しておいた方がいいと思います。朝、子どもと一緒に動物園に行って来ました。遊べる場所として市の施設があり、子どもたちが沢山いてワイワイ楽しめる場所があって良い所だなと思う一方、私自身育児フレックスを使わせていただいていて、先ほどもありましたが時短勤務のようなことを企業がしっかり手当をする等、子育てに関しては企業の努力もあれば、一方で市が手当てしていかなければいけないことも大きくあるのではないかと感じています。

（根本学部長）　ありがとうございます。　もうひとつぐらいいかがでしょうか。

（石川委員）　色々お話を聞いていると、この先30年ということを考えると、どうしても切り捨てられないことが、人づくりというか人間力、そういったことを乳幼児期からしっかり考えることがとても必要ではないかと思いました。今子育て中の問題もありましたが、お母さんの視点から考えるのも大事ですし、お父さんの視点から考えるのも大事です。そういった中でも、子育てということで考える時に、私たちは職業柄一生懸命勉強するけれど、子育ては奥が深いものだと感じます。そういったことを子育て中のお父さんお母さん、周りのおじいちゃんおばあちゃんはどこまで意識できているでしょうか。これだけは押さえて子どもと接してもらいたいなというポイントが山ほどあります。それを是非伝えられるような場所があると良いです。習慣や自分の好みだけで子育てをするというのも、ある部分では良いとは思いますが、どうしても押えてもらいたいところもありますので、是非お父さんお母さんと一緒に話し合えるような、またお母さんの負担がかなり大変だと思いますので、そういう話ができる場があると良いと思います。そして、やらまいか精神については私も小学生の頃友達に「やらまいかやらまいか」と誘われて何かをしたというような経験がありますが、今は「やらまいか」と言われても、やるだけ損というような風潮があります。先ほども市民活動の担い手がないという話がありましたが、それも同じことだと思います。要するに便利な世の中になって携帯電話とコンビニがあれば何も要らない、苦労することはしたくないというような方が増えてきているように思われます。そんな中でどんなまちづくりをしていくのか悩むところです。「市民協働を進めよう」の中に、「人は他人と関わりを持つことで存在意義が生まれます。」という文言がありますが、他人と関わりを持つことで周りの人、身近な人を支援して輝かせるし、同時にその人は輝いて見えます。そういったことの素晴らしさみたいなもの、そこに「未来へかがやく創造都市」とありますが、きれいなモノを着ていれば輝くかといえばそういうことではなく、市民一人ひとりが意識を持って支援する人が輝く、それに伴って自分も輝く、とても幸せ、あるいは共に成長し合っている、ということなども是非意識しながら、みんなと一緒に頑張っていく、協働していく、そういうようなことを、小さな輪から段々と大きな輪にしていくことができたらと思います。

（根本学部長）　まだまだあると思いますが、ひとまず論点をまとめます。創造していくという意味で次の世代を育てることはこれ以上クリエイティブなことはありません。それは子どもを育てている人以外は関係ないかと言うと決してそうではありません。地域全体、社会全体で、あるいは子どものいる世帯もそうでない人も、次の世代を皆で育んでいるのだという「協働」があります。もう一つは資料5のデータにもありますが、単身世帯化は進んでいます。そうすると子育てでも何でも孤立してしまいます。孤立すると色々な社会問題が起きてしまいます。孤立しないで連携連帯していく、協働していくというところに今の話はつながっていくのではないかと思います。では残り10ページ以降、その他という括りで、多文化共生、スポーツ、ボランティア辺りで何か意見はありませんか。

ここにも奇しくもメンタルヘルス、ひきこもりに言及があります。これは先ほど言った孤立化ですが、それでいいのか、30年後そういう方向に向かって良いのかという問題提起だと思います。

（田中委員）　メンタルヘルスの項目があります。私は小・中学校、地域の高校の学校用務員をずっとやっていました。特に高校については、実社会に出る人が多いから打たれ強い子どもをつくってくださいと言っています。ちょっとしたことで悩み、悪い場合は自殺ということになります。これもやっぱり教育の問題です。教育があってこそ初めてスポーツも、ボランティアもできます。ボランティアについては、今年は民生委員の改選期になっていて、私の自治会ではやってくれる人がいますが、その他、ガールスカウト・ボーイスカウトなど色々やっています。そういうものに対する地域の理解がないと前に行けません。30年くらいガールスカウトの面倒を見ている人がいますが、その間、環境は違います。また多文化共生とありますが、市長が言うように国際的なことは避けて通れません。私は基本的に教育の問題だと思います。教育は広くて、子育てから全部入ってきます。それが産業やその他に広がっていくという意味で、「やらまいか」を「やめまいか」にしないようにするには、教育で、打たれ強い何度でも立ち上がっていくような子どもを作っていくことが必要です。またスポーツでは出身地が全国へタダで宣伝してくれるから良いです。スポーツというのはプロ野球の選手になるとかということだけではなく、それぞれ違う面でスポーツに対して、「医療機関と連携して化学が発展する」などがありますから、浜松市が全国的に名を売り出すチャンスではないかと思います。

（松本委員）　ボランティアについて「元気な高齢者がボランティアとして地域で活躍している」とあります。これはとても注目すべきフレーズだと思います。高齢者と一口で言っても70代になっても元気な人は元気です。特に60歳以上になると年齢ではなく、本当に元気な人は70歳でも80歳でも働けます。ですから例えばケア施設などでは、最近、高齢者が高齢者の面倒を見ている場面が出てきました。元気な高齢者が、体に弱さを覚える方の面倒をみる。そうするとどういうことが起るかというと、面倒をみる高齢者が生き甲斐を感じ、一方、面倒をみられる方も自分と同年代の人ですからお互いの話も合い易いです。高齢者の活用というと言葉が悪いですが、元気な高齢者に働いていただくことにより、両者間に自然と人間的な絆ができます。このようなことから、このフレーズは、福祉にも関係して良いキーワードではないかと考えます。

（根本学部長）　今日やっと本番が始まりました。この後、説明がありますが、意見交換会に本日出た論点をまとめてもっと深く意見を聞くということに進むようです。今日まだ発言が十分ではないという方は、一週間くらいの間に事務局にどしどし意見を言ってください。今日やりとりした意見は強引にいくつかのまとめにしてしまいましたが、良く議事録を見て次の意見交換会では、事務局と相談して複数の意見が連携するようなものを柱として仮につくらせていただきます。市長さん何かあったらいかがでしょうか。

（鈴木市長）　それぞれの思いを話していただきまし。変にまとめない方が良いと思います。

（根本学部長）　議事はここまでです。次の意見交換会について事務局から説明をお願いします。

4　意見交換会の開催について

（事務局）　（資料7説明）

（根本学部長）　何か質問はありますか。

（村田昌委員）　意見交換会のために希望順位を1から4まで選ぶというのは、41項目の中から4つ選ぶイメージかと思います。今までの皆さんの中でも一つに絞れない意見が多くありました。例えば観光とエネルギーとか森林、或いは子育てと地域と公共施設と市民協働など、幾つかにまたがるというのが皆さん言われたことだと思いますので、それを4つに絞るのは非常に難しいです。資料6の「未来の理想の姿」にも「再掲」とありますが一つに絞れなかったということですので、第1希望から第4希望まで書く時もこれとこれを組み合わせたということが書けると良いと思います。41を4にするのは極端な縦割りと切り捨てのようになってしまいますので、組み合わせによって何かを生んでいくことができればと思います。運営側は大変だと思いますが、こちら側の希望としては複数の組み合わせを書きたいと思います。

（根本学部長）　今は入り口の段階で、きちんと整理できないことがあります。とても良い提案をいただきました。4つというのは単語が4つという意味ではなく、「A+B」とか「A+B+C」というのをありとします。だからと言って全部並べると意味がありません。今日の意見交換を参考にしながら、「教育、福祉」ではなく、「教育プラス福祉」「観光プラス林業」などプラスアルファありということで4つ上げるということにしたいと思います。それでよろしいでしょうか。

（賛成）

（酒井委員）　開催の時間ですが、午後7時から9時を割けない訳ではありませんが、例えば遅刻しても良いとか、早退しても良いでしょうか。チームを二人で形成すると難しいかと思いましたので確認させてください。

（事務局）　それも資料7-2に記入してください。

（根本学部長）　これで本日の議事は全て終了しましたので、司会を事務局に返します。

5　閉会

（事務局）　根本学部長ありがとうございました。委員の皆様も活発な議論をありがとうございました。これで第2回浜松市未来デザイン会議を閉会します。

なお、第3回は平成26年1月26日の日曜日、午後2時から、会場は同じ全員協議会室にて開催します。

それでは、気を付けてお帰りください。